

30

## 賀川玄悦の学統——賀川嫡家と 大阪賀川家との関係について

今井 秀

今井整形外科

賀川玄悦は賀川流産科の鼻祖で、わが国の産科学の基礎を築き、その一門は近代産科学の発展に大いに貢献した。玄悦は、正常胎位「背面倒首」の発見や、救護の五法（回生、坐草、抒倒、整横、舉攣）と、産後の治術（鉤胞、禁暈、退崩、納腸、斂宮、復肛）六法を刻苦勉励し独学で創始した。その産科手技は殊の外器用で妙を究めたものであった。六十七歳時に産前七十五難、産後百二十五難を挙げて、『子玄子産論』二巻を著した。この書は、漢文が不得手な玄悦のために、皆川淇園が補翼し執筆したもので、出版とともに世間の耳目を集めた。後に『産論』は、シーボルトの高弟美馬順三により『日本産科問答』として蘭訳され、欧州諸国でも広く知られるところとなった。

玄悦には三人の子供があり、長男の満郷（玄吾）は継母と和せず、別に油小路丸太町に業を開いた。長女はさのといい、玄悦の門人である出羽秋田出身の岡本玄迪に娶らせ、後継させた。また次男は金吾といい、夭逝している。

昨年、大阪賀川家九世の賀川寛氏から「賀川家略系譜」を閲覧させていただいた。この系譜には、玄悦の父方で代々彦根藩に仕えた三浦家と母方の賀川家の詳細な由緒と、玄悦や嫡家の履歴が記されている。また、満郷、満定、満崇と満蔭の肖像画も所蔵されていたので、今回供覧する。

「賀川家略系譜」には、満郷は、「玄吾と稱す。字は徳夫、有齊と號す。医術を修め父玄悦の術を伝え、継母と和せず別に油小路丸太町に業を開く。寛政五癸丑（1793）年三月廿一日病没。享年六十一歳。洛西衣笠山等持院に葬る。諡して烏有齊玄道無隠居士と云う。著書あり。産科紀聞。産道口訣并に手解解。産道秘書。有齊産術記等なり」と記される。

二世の満定は、「幼名玄吾と云う。字は子清、蘭齋と號す。（中略）天保四（1833）年十月九日叙正六位下。同年十月十日病没。享年六十三才。諡して温克院蘭齋昌英居士と云う。性質温厚朴実にして文雅を好み、下鴨村鴨流に沿って白鷺亭を建て貴族名家と此の亭に会合す。著書あり。産科秘要。産科議要。産科治術秘訣等あり。又順産分娩器械探領器を發明し、文化八（1811）年四月廿五日申刻皇子御降誕の時始めて用ゆ」とある。

三世の満崇は、「幼名玄吾と云う。字は子徳、蘭臺と號す。（中略）嘉永五（1852）年五月廿八日叙従五位下（五十七才）。遷任筑前守。文久四甲子（1864）年二月十一日病没。享年六十九歳。諡して騰芳院蘭臺芝山居士と云う。著書あり産科秘要と云う。父満定と共述する処なり。又順産分娩器械纏頭絹を發明する。此器は探領器の如く分娩後に癍痕を止めず其の欠点を補う。安全無創也。此術は一子相伝す。天保三（1832）年四月九日皇子御降誕の時始めて用ふ」と記される。

また、満崇の長男秀哲は、「文政十二（1829）年生る。初名泰二郎、満蔭と號す。大阪賀川家の嗣となる。明治廿六（1893）年一月十四日死。法名通玄院透雲禪閑居士。大阪賀川家は玄悦の嫡係有章の建つる処なり。即ち満郷の門人に賀川姓を興ふ。有章の嗣は備中倉敷の人。名は恂徳。字子允。秀哲と稱し、南龍と号す。門人を以て其の四女と養子をなし家を譲る。名は晉。（号は蕃齋、）秀益と稱す。秀哲は其の嗣となる」とあり、大阪賀川家を継承した。

玄迪と満郷は互いに相容れず、初代玄悦はこれを憂い、満郷と玄迪夫妻に宛て「余の死後は必ず両家と親協力して濟生の業を續けよ」と懇々と諭し遺言したという。

今日、賀川嫡家と大阪賀川家との交流はあるが、賀川正家との確執は未だに解けていないようで、ともに名家であるだけに残念なことである。